

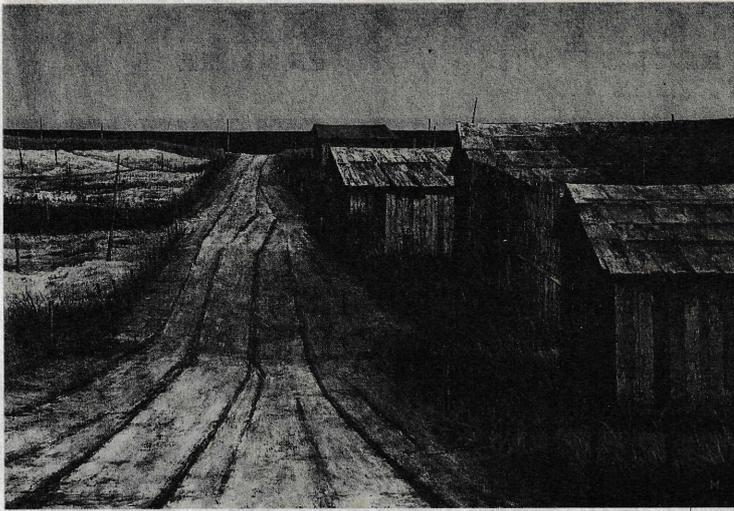
文化

展覧会へ
ようこそ

12月17日まで、新潟市北区郷土博物館

晩秋の浜辺の風景で知られた、新潟の美術界を代表する画家、西村満が昨秋、逝った。

新潟市北区郷土博物館では、西村の画業を展観する企画展を開催中である。1935年、十日町市(旧貝野村)で生まれた西村は、その後、長岡市や五泉市(旧大浦原村)で暮らし、新潟



西村満「海への道」1992年

風景探究と創造の歩み

余にわたって西村が取り組んだのは、当初の居住地であった山の下の周辺地域に広がる工場街であった。しかし画中の工場街には、高度成長期の活発な生産活動の喧騒や熱気は感じられない。西村が描き出したのは、大気汚染による人為的な灰色の空に覆われた、廃墟のごとき無人の世界だった。

「北の風景」における主要な題材である「鈍色の空の下に広がる浜辺と廃屋」の表現に、西村が本格的に着手したのは、1970年代半ば以降のことである。小屋が砂丘の道に沿って連なる「海への道」は、その人影のない静寂の世界に自己の孤独を投影した内景表現である。海風にうねる砂丘に孤高の表象であるかのような廃屋一つが描かれた「北の浜」では、自然への畏怖と人間存在のほかなさという視点が明確に打ち出されている。目にみえない風の動き、空気の重さや湿り気までも繊細に表現する西村の写実的作品世界には、人間が登場しない。自然のなかで人為の痕跡が示

佐渡の北沢浮遊遺跡を題材とした「廃墟の階段」

の連作を制作している。彼が着目したのは、古代遺跡のような建造物ではなく、建物の外に設けられた目立たない階段であった。この荒廃ぶりは、風化を促した自然の力のみならず、労働の跡を如実に語っている。現実の風景と向き合いながら、西村はそこに繰り広げられた人間の営みの時間と空間を、寂寥たる自身の「沈黙の風景」として描いたのである。

うつりゆく現実世界の行方をみつめる西村には、自然に対する絶対的な受容の姿勢があり、人間に向けられた愛と懐疑がある。それらを全て包み込む空洞のごとき「北の風景」の時間を、画家西村満は生きたといえよう。

当展では、工場街、浜辺、廃墟・廃墟の各シリーズを中心とした21点の油彩作品により、西村満の「北の風景」の探究と創造の歩みをたどる。

(神田直子・新潟市北区郷土博物館学芸員)

× ×

同博物館は新潟市北区嘉山。月曜休館。無料。